

## 新春法話「夢をもって人生楽しく」

謹んで、新春のお慶びを申し上げます。

本年も正光寺 初詣にお参りいただきありがとうございます。

昨年は、三月十一日の東日本大震災によって、私たちは未曾有の大惨事を目の当たりにしました。その中で、私たちは、命の尊厳 家族の絆 人と人とのコミュニケーションの大切さを大いに学んだ一年でもありました。そして震災によって、多くの命が奪われました。犠牲になった人たちの無念を思えば、生き残った私たちが、後世にしっかりと命の教えを伝えなくてはなりません。特に、被災した子どもたちが、この困難を乗り越え未来に対し明るい希望がもてるように支えていくことが大切でしょう。

過去日本は、幾度と無く大惨事に見舞われましたが、その困苦を克服してきました。その原動力となったのは、未来に対し明るい「夢」をもちつづけたことといってもおかしくありません。夢の実現に向けて、絶え間ない努力が、また次の世代の子どもたちに新たな夢を産ませ、その連続によって、日本は今日の豊かさを享受することができました。

ところで話が変わりますが、子どもたちに夢を与えた一つにドラえもんという漫画があります。今年ドラえもん誕生まであと百年だそうですが、作者である藤子・F・不二雄は、既に故人となつて十五年が経ちましたが、人気は今も衰えることなく、日本だけでなく世界の子どもたちにもひろく愛されています。彼は言います。

「子どもは、成長するにつれ、彼らをとりにたく日常性に取り込まれ順応していくわけですが、夢と冒険に憧れる心は失つてほしくない、と思います。そして、その中から、二十一世紀のなり目の冒険家が現れることを、期待します。」と。このメッセージが、漫画を通じて伝わるからこそ世代を超えて多くの人を魅了してきたのだと思います。

しかしこの言葉とは裏腹に二十一世紀を迎えて十年、今日の日本の若者や子どもたちは未来に夢を持たなくなつてきていると言われています。何故なのでしょう。ひよつとすると大人が夢と冒険に憧れる姿を子どもたちに見せないからなのではないでしょうか。親が現実の生活、今日や明日に固執し、子どもを過剰なまでに保護しているようでは、子どもたちは冒険に憧れをもつことはなく将来に夢を描くこともないでしょう。

夢と冒険に憧れる心は、非日常的なことだけれども、想像力が高まり、生活に活気をもたらします。私たちも忘れかけている子ども時代に描いた「夢」と「冒険」を思い出し、たまには童心に帰つて、大いに人生を楽しんでみてはどうでしょうか。大人の「夢」にむかつて生きている姿が、子どもたちに人生の楽しさや素晴らしさを教え、夢をもつきっかけとなることでしょう。

所詮人生は儚（はかな）いものだとはよくいいますが、儚く感じるのも、夢に向かつて生き、夢を実現し最期を迎え自分の一生を振りかえったときに言える言葉なのかもしれません。ただ一度の人生を、今日に振り回されて一日一日を生きていくなら、一生は虚しいものとなつてしまふでしょう。だからこそ夢をもつて人生楽しく生き、各々の人生に誇りをもつていただければ、今後更なる良き社会が築かれていくのではないのでしょうか。

最後に、ご本尊様 お地藏さんにも夢があります。それは、お釈迦様のように、種々の困難で苦しみ悩んでいる人たちに寄り添い、苦しみを自らが代わりとなつて受け止め、福を授けて、人々を幸せな人生に導く仏さまになることです。その為には右の手の錫杖と左手の如意寶珠をもつて日々精進されています。

皆様には、どうかこのご本尊様の心を知っていただき、深く信心を養い、ご加護がありますことをご祈念申し上げ、一言新春の法話とさせて頂きます。

合掌

平成二十四年 壬辰閏年 元旦

延命山正光寺 住職 高野隆晃